

神戸市総合基本計画審議会（第2回） 要旨

開催日時：2025年8月5日（火曜）13時～15時30分

開催場所：神戸市役所1号館14階 大会議室

出席者：

氏名	所属および肩書
石川 路子	甲南大学 経済学部 教授
伊藤 絵実里	株式会社くさかんむり（元 神戸地域おこし隊）
岩田 かなみ	株式会社W SoWelu コミュニティマネージャー
小野セレストア摩耶	同志社大学 社会学部 准教授
佳山 奈央	La vie est belle 株式会社 代表（サトウプレイズ PORTO を運営）
河南 忠和	神戸市会議員（自由民主党）
客野 尚志	関西学院大学 総合政策学部 教授
小林 鮎美	連合神戸地域協議会 副議長
品田 裕	神戸大学大学院 法学研究科 教授
高瀬 勝也	神戸市会議員（公明党）
中野 みゆき	特定非営利活動法人 Oneself 理事長
中村 浩一郎	株式会社三井住友銀行 公務法人営業第二部長
ながさわ 淳一	神戸市会議員（日本維新の会）
服部 孝司	公益財団法人神戸市民文化振興財団 理事長
飛田 敦子	認定 NPO 法人コミュニティサポーターセンター神戸 事務局長
平田 恭子	西日本旅客鉄道株式会社 理事（近畿統括本部兵庫支社長）
森本 真	神戸市会議員（日本共産党 団長）
山下 裕子	全国まちなか広場研究会 ひと・ネットワーククリエイター／広場ニスト
よこはた 和幸	神戸市会議員（こうべ未来 団長）
和田 真理子	兵庫県立大学 国際商経学部 准教授

欠席者：

稲垣 賢一	一般社団法人 兵庫県中小企業診断士協会 理事
浦島 理恵	インスタグラマー
嘉納 未来	ネスレ日本株式会社 執行役員（コーポレートアフェアーズ 統括部長）
佐合 純	iC 株式会社 代表取締役
村川 勝	一般社団法人兵庫県中小企業家同友会 代表理事

（敬称略、五十音順）

1. 開会 司会 企画調整局 山本副局長

- ・資料説明、確認

2. 西尾局長挨拶

- ・ご多忙の中、第2回審議会にご参加いただき、感謝申し上げます。
- ・前回、意見集約の方法などについていただいたご意見をもとに、ワークショップやシンポジウムを開催し、市民の意見を集約した。その際には委員の皆様にもご協力いただき、感謝する。
- ・本日は、これらの市民意見をA Iなどの技術で集約し、反映させた例を参考にご審議いただきたい。あわせてK G Iについても審議をお願いしたい。活発なご意見を願います。

3. 議事 (1) 市民意見収集の取り組み状況報告

<事務局>

- ・資料2に基づき説明

<会長>

- ・市民意見収集の取り組みについての議論を、2つに分けて進める。まず全体的な方法や反省点について意見を求め、その後、提示された3つのたたき台の修正内容や維持点について検討する。
- ・まずは1つ目の取り組み全体について自由に意見を求める。

<委員>

- ・前回、ワークショップを行うときに、40～60代の経済活動の中心を担う方の意見が少ないという点を指摘したところ、神戸市が努力して意見をまとめてくれたことに感謝申し上げます。この年代は働き盛りで子育てや介護にも関わるため、その意見の反映は重要。
- ・また、以前から提案していたA Iの活用について、今回の意見集約で分かりやすさに貢献したことに感謝する。今後は、市民が自分たちの意見がどのように反映されたかを確認できるよう、広報誌やネット、デジタルサイネージなどを通じて公開してはどうか。

<会長>

- ・今回のワークショップでは、中小企業家同友会、中小企業診断士協会、三井住友銀行、J R西日本などの協力により、現役世代や市民から多くの意見を集められた。また、A Iを活用することにより、莫大な量の意見を効率的に処理できた点はすばらしい。今後の課題は、それを市民にどう還元するかである。

<事務局>

- ・市民から寄せられた意見を何らかの形でフィードバックすることが重要だと認識している。具体的な方法はまだ決まっていないものの、今後しっかりと検討していく予定。

<委員>

- ・まず、フォーラムやワークショップの開催に感謝したい。特に若い世代である高校生や大学生か

らどのような強い意見が出たか、具体的な内容について知りたい。

<事務局>

- ・高校生・大学生の意見は、他の世代と大きな違いはなく、似ているものが多いという印象。しかし、ワークショップを通じて神戸市の取り組みや再開発などの説明に共感し、「市政への期待感が高まった」「自分も関わりたい」という反応が非常に強く、有意義な機会となった。

<委員>

- ・ワークショップは、普段忙しくて市の広報やアンケートを見落としがちな人にも、身近な場所での開催が参加するきっかけとなり、市政に自分の意見が反映される実感を持てる点が良かった。
- ・一方で、A I で集約された意見が、多くの要素を含みすぎて寄せ集め感が出ているという印象もある。今後、それをどのようなプロセスで整理し、すっきりさせていくのか、現時点で決まっていることがあればお伺いしたい。

<事務局>

- ・意見の集約・整理は行い、現時点での例として提示した。この審議会で議論を通して決定してほしい。

<会長>

- ・意見集約について、「寄せ集め」も良くないし、逆に「シャープ」すぎても趣旨に沿わないので、後半の議論で意見を求めたい。アンバサダーの方からも、実際にやってみた感想を聞きたい。

<委員>

- ・ワークショップは「神戸にコミットできる人」を募り、神戸にゆかりや愛着のある担当部署の人が集まった。顧客から得た意見を持ち寄って議論が非常に盛り上がり、参加者も「神戸がこうなっていきたい」という熱意を持って参加してくれた。自分たちの意見が反映され、その行方を見守る立場になる実感が得られたことで、前向きな感想が多く聞かれた。参加者は30～40代が中心だったが、今後はより若い世代を対象にしても面白いのではとの意見も出た。

<委員>

- ・現場社員を中心に集めてワークショップを実施した。普段から市民と接する機会が多い社員をあえて集めたことで、活発な議論が生まれ、楽しそうに意見を交わっていて、大変盛り上がった。
- ・この取り組みについて、1. 参加した社員へ成果をフィードバックすること、2. 市民に「神戸市の計画がどう形づくられているか」を伝えること、3. 他の自治体や全国に向けて発信すべき、の3つの方向性を提言したい。

<会長>

- ・参加者や市民への情報発信は当然だが、他自治体への発信はチャレンジングな面もある。神戸市も過去に他自治体から学んできた経験があり、還元の形でできるのではないかと。

<委員>

- ・多様な世代が混ざる「ごちゃまぜ」をテーマにワークショップを企画・開催した。主婦・学生・経営者などがグループ内で意見交換することで、異なる「日常・非日常」の視点を共有して活発な議論ができた。参加者からは、普段市政に関心が薄い人でも、「市政に関わる場に参加できた楽しさ」や「多様な世代とコミュニケーションできた楽しさ」があったという前向きな感想があった。今後は審議会委員所属団体同士のコラボも実現したい。

<会長>

- ・多様な市民が参加されていて面白い印象があった。外国人のワークショップについてはどうか。

<委員>

- ・留学生向けのワークショップを企画した際、約 10 名に声をかけたが、当日は 4 名が参加した。ただ、参加した全員はいずれも神戸在住 4 年目で、日本語の理解度が高かったため、スムーズに議論が進んだ。神戸の「海と山がある自然の豊かさ」の魅力など、外国人ならではの視点から積極的に意見が出され、兵庫区でのワークショップは盛り上がった。
- ・一方で、WEB アンケートでは兵庫区と長田区からの回答が少ないことが残念。そこで、兵庫区や長田区でワークショップが開催されたのか、また参加者の年齢層や属性について伺いたい。

<事務局>

- ・兵庫区・長田区でのワークショップは兵庫高校で開催され、高校 2 年生 280 名が参加した。職域で見ると、連合神戸や機械金属工業会などと協力して、幅広い層から意見を集めることができた。また、各区の地域協働課の職員からも、日々の地域回りで感じている意見を収集している。

<会長>

- ・ご意見がなければ次の議題に移りたい。今度は内容面について、提示した 3 つの方向性や反映例（マーカー部分など）について、順不同で構わないのでご意見をお願いしたい。

<委員>

- ・神戸市が AI と対面のワークショップをうまく融合させて案をまとめたのは素晴らしい。感想としては、ワークショップで多くの希望やアイデアが出る一方で、「誰かが担ってくれる」という他人任せの空気が生まれることがあるため、市民一人ひとりが「担い手」であり「主体者」であるというメッセージを入れるべき。また、産官学民が連携・コラボレーションして進めることも今後の軸として文章に含めるといいのではないかな。

<会長>

- ・具体的には 25 ページの前提文章の主語に「参加者の主体性」を示す表現を加えることと、もう 1 つは産官学民の連携に関する表現を、3 つの方向性のどこかに入れるということか。

<委員>

- ・前提文章があるのは分からなかったが、直接的に書くと行政側の「押しつけ感」が出る恐れもある

るので、やわらかい表現にしてはどうか。また、「主語」がない文章のまま進めるのではなく、前提文章や基本方針などに含めることも検討してはどうか。

<会長>

- ・今回は下におろしていく3層構成なので、主体的に取り組む「主語」は第3層目に盛り込むのが適切ではないか。ただし「神戸市」と書くと行政的になり、「神戸市民」と書くと市外の関係者が外れてしまうため表現が難しい。しかし、自分ごととして主体性を持って考えてほしいというニュアンスをどこかに取り入れたい。ご意見がなければ3層目での記載も含めて検討したい。

<委員>

- ・方向性のタイトルを、よりシンプルかつスマートな言葉に修正するのはどうか。例えば、方向性②を「越境」に、方向性①を「A I 先進都市目指す」といった簡潔な表現にする。その下に補足説明文があるので、方向性タイトル自体は短くても十分に意図は伝わるのではないか。

<会長>

- ・よりシャープですっきりした表現がよい。「日常と非日常が交わり続ける都市」といった鍵括弧内の表現にするだけでも、かなりすっきりするのではないか。

<委員>

- ・単に短くするのではなく、軸となる言葉をシンプルに表現することが大事。詳しい説明は本文で補えばよいので、タイトルはコアな考えを直感的に伝える言葉にしてはどうか。

<事務局>

- ・シンプルに見せることは重要だと理解している。しかし、このタイトル部分はアンケートやワークショップで特に多くの参加者から共感を得た部分だった。（最終的に審議会にてご判断いただくことであるが、）これまでの経緯を考えると、タイトルを抜本的に修正するのは議論が必要であると考え。

<会長>

- ・今後の参考にしたい。ほかにご意見はあるか。

<委員>

- ・最終的なアウトプットがどんな形になるのか分からないので、具体的なイメージを知りたい。

<事務局>

- ・この基本計画は条例に基づき、神戸市会で議決を得る必要があるため、3つの方向性と前提の部分について、正式な文書をきちんと作成しなければいけない。議決後、冊子・動画・イラストなど多様な方法で市民に発信していけるのではないか。

<委員>

- ・21 ページと 24 ページの「震災で頂いた多くの支援に」の「頂いた」は、物資以外の支援もあったため平仮名がよいのではないか。

<事務局>

- ・平仮名に変更させていただきたい。

<委員>

- ・17 ページと 20 ページの「日常と非日常が交わり続ける都市」は、神戸の魅力をよく表現できている。私自身も、林や農村に囲まれたニュータウンから下り、古民家カフェや地元の野菜を買いに行くのを楽しんでいる。一方で、「都心部、特に三宮では居住機能を一定程度抑制しながら」の一文が気になる。最近は都心回帰で住宅が増え、神戸の場合は大阪に通勤する人の数が目立ってきている。都心は都心らしく商業・業務の中心であるべきだと考えているので、居住機能を抑制することは賛成しているが、「抑制」という言葉がワクワク感に欠ける。この表現が適切なのか、むしろ各論のところで出すべきではないか、この場で議論したい。

<委員>

- ・今のご意見はもっともだ。「抑制」という表現は希望を示す文章には合わない。「商業施設や業務機能を集積させて魅力的な都心にしていく」と書くだけで十分ではないか。政策は将来変わる可能性もあるので、この部分は見直しが必要だと考える。たとえアンケートやワークショップで異論が出なかったとしても、委員として責任ある意見を述べ、必要に応じて文言を変えることがあっても良いと思う。

<会長>

- ・「一定程度抑制しながら」という部分についてのご意見だ。

<委員>

- ・加えて、三宮という地名もわざわざ出す必要がないと考える。

<委員>

- ・私も、三宮という1つの地名だけを出すのは疑問に思う。また、「日常と非日常が交わり続ける」という言葉も分かりにくく違和感がある。

<会長>

- ・20 ページの青色のマーカー部分は、ワークショップやアンケートで多くの方が共感された部分であり、簡単に変えるのは難しい。審議会に変更する場合にはしっかりと議論と根拠が必要だ。一方で、青いマーカーが引かれていない部分は検討の余地がある。日常と非日常の捉え方は人によって違うので、最大公約数的な表現を検討する必要がある。三宮の居住機能の抑制の部分についても、さらに意見はあるか。

<委員>

- ・20 ページの一定程度の「程度」が赤文字になっている。その経緯や背景が知りたい。

<事務局>

- ・ワークショップで「一定抑制」という言葉は不適切との意見が複数あったため修正した。

<委員>

- ・委員の皆様のご意見を拝聴し、議論にもう少し時間をかけてよいのではないかと感じた。市民の声を大切にしつつも、その意見が多数だから決定というものではないと思う。締め切りはあるかと思うが、議論が続けられるような環境づくりをしてもらいたい。価値観が大きく変化している今の時代だからこそ、プロセスそのものを大切にしてもよいのではないか。

<会長>

- ・もう少しよく考えてほしいというご意見だと受け止めた。ほかに、意見はあるか。

<委員>

- ・「抑制」という表現は違和感がある。神戸市の人口はピーク時の154万人から現在148万人に減少しており、2070年頃には88万人程度まで減るとの推計がある。歴史を見ると、高度成長期に三宮などの市街地に住めずに郊外へ移住する人が多かったものの、今後人口が減少すれば、逆に暮らしやすい平地に住みたい人が増えるのは自然な流れだと考えられる。こうした背景を踏まえると、現在の文章は将来を考えると再検討の余地があるのではないか。

<会長>

- ・この後のKGIの議論とも重なる内容であるため、急いで結論を出すのではなく慎重に検討したい。そのため、この件についてはしばらく預からせていただく。
- ・次の議事に移りたいが、3つのたたき台について、ほかに意見はないか。

<委員>

- ・神戸空港の国際化で、東アジアの都市へ就航が始まったことは、神戸の数少ないポテンシャルの1つだ。この数年で大きく変革して「攻めの神戸」を作っていくといけな。市民の意見をAIで整理するのは素晴らしいことだが、全体的な強弱が今一つ感じられず、特に空港国際化のインパクトが表現しきれていないと思う。また、観光ではオーバーツーリズムや観光公害に悩む他都市に比べ、神戸は遅れを利点に「賢いインバウンド戦略を目指す」という表現があってもいいのではないか。さらに、多様な主体や団体による地域のつながりを守る決意を示すべきだと思う。神戸は劇的に変わっていくぞという方向性を力強く描いてほしい。

<会長>

- ・方向性①についてのご意見だ。具体的にどんな表現がよいか。

<委員>

- ・神戸は港で大きく繁栄してきたまちだが、海の港は国際競争力が低迷気味だ。その一方で、今は空の港で大きく飛躍する分岐点にあり、この変化を市民に感じてもらいたい。

<会長>

- ・そこは表現の工夫でなんとかかなりそうだ。今日の意見交換でいただいた「連携の問題」、「ダイナミックな飛躍を目指す表現」、「都心の表現」については、今後検討してご報告したい。それ以外の点については、概ねご理解いただいた。

3. 議事 (2) K G I の設定について

<事務局>

- ・資料3に基づき説明

<会長>

- ・K G I の設定は中間段階なので、本日たくさんの意見をいただき、専門家や国とのヒアリングも踏まえて案を練っていく段階だ。どの指標からでも、ご質問やご意見をいただきたい。

<委員>

- ・神戸市全体だけでなく、地域ごとにK G I を出してもよいのではないか。地域ごとの特性に合わせて強みを伸ばす前向きな地域づくりにつながれると思う。
- ・方向性③の「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」について、都市の景観など数値化が難しい指標は、数値化の方法によって大きく評価が変わることがあるので、慎重に扱ったほうがよいと思った。

<会長>

- ・K G I を区ごとで算出してほしいということか。

<委員>

- ・はい。最後にトータルを算出するのはよいが、そのプロセスで地域ごとに分ければ、自分たちの暮らす環境を見つめなおすきっかけになると思う。

<会長>

- ・神戸市のデータ収集の体制からすると、少なくともK G I の基礎になっているデータをさらに細かく調べて明らかにすることは技術的にはできると思う。ただ、K G I の性質上、どのタイミングでどのように設定・活用するかは検討が必要だ。技術的な答えを待ちたい。
- ・客観指標は、その根拠まで調べないと客観性は担保されないという指摘だ。今後、国のヒアリングで聞いて勉強していただければと思う。

<委員>

- ・方向性①について、「新たな時代の国際都市」になれたかをどうやって測るのか。現状示されている神戸市の経済規模だけで達成度を評価するのは疑問に思う。かといって、空港のインバウンド数や国際線の便数などの小さな指標も適切とは言えない。他にも何か指標が必要ではないか。

<会長>

- ・方向性①のタイトルと指標がマッチしているかというご意見かと思う。単に神戸空港の利用者数だけでは粒度が異なるため、この方向性に合った国際性を示す指標があればご提案いただきたい。

<委員>

- ・K G I の目的や意味を明確にする必要があるのではないかと。方向性②の「日常と非日常が交わる都市」についても、大きな目標が人口だけになっている印象がある。今すぐK G I を定めるよりも、下位の各論の細かい達成度を積み上げて、総合的にK G I が達成できたかどうかを評価するのがいいのではないかと思う。

<会長>

- ・K G I の整理はどうか。

<事務局>

- ・K G I は、10 年間の計画で達成したい成果を端的に表す数値だと思っている。例えば方向性①の「新たな時代の国際都市へ」という表題だが、神戸が海外とつながる機能をもつことで、神戸独自の経済圏を維持することが目標となっている。それを数値として測るために、2 つご提案させていただいた。
- ・方向性②は、神戸の多様な魅力によって多くの人に愛されて選ばれるまちになりたいということが目標となっている。その結果として「住まわれるまち」として選ばれることを、人口目標というK G I で設定した。社会動態として課題がある年齢層を好転することや、市内全体がバランスよくということを何か示せないかと考え、具体的ではないがご提案させていただいた。

<会長>

- ・各ページの「ありたい姿」について、タイトルや方向性①とのつながりをもう少し明確にする必要がある。経済圏の維持だけでは文章として物足りない印象があるので、攻めの姿勢をどう文章化し指標化していくのか、引き続き検討いただきたい。
- ・方向性②もバランスが大切だが、ここに良い指標を持ってくるとある程度解決できると思う。例えば昼夜人口比率などになると思うが、ご専門の委員に時代に合った新しい指標を教えてもらいたい。大学院生からは、定期券の各駅発行の行き先別の統計が人口移動の良い指標になるとの提案もあった。G I S を使うこともできるかと思う。

<委員>

- ・方向性③の地域幸福度は、一般的には主観指標と客観指標の両方が使われるが、神戸市はまず客観指標を活用されたいということだ。ただ、5 ページに主観データと客観データの指数があるが、

「地域とのつながり」や「多様性と寛容性」などは客観データだけで把握できるか疑問がある。主観データを用いない方針であっても、例えば兵庫県は県民豊かさ度調査で主観データを収集しているので、そのような主観的な側面を補完する工夫もできるのではないか。

<会長>

- ・ 現行の計画ビジョンでも主観データは使っているが、分母の設定が難しい。例えば子育てについての満足度を測る場合、分母が子育て世代なのか、子育てを終えられた方を含むのか、全市民に聞くのかで結果は随分変わる。そのため、今回は安全を見て客観指標とした。ただ、主観でないと測れないものは当然あるので、今後も研究が必要だ。
- ・ 日本人の幸福度は国際指標で極端に低く出る傾向があり、こういった点も主観指標の難しさにつながっている。

<委員>

- ・ 方向性②の社会動態は、「プラス」よりも「増加」や「漸増」といった表現が良い。転出超過の抑制は難しいため、むしろ転入増加に力を入れるべきではないか。神戸市は転入を増やすための政策を行っているので、今後もその方向性で打ち出してほしい。
- ・ 市内人口バランスの目標値が今後検討となっている。郊外を増加させようという思いなのか分からないので、お聞きしたい。

<会長>

- ・ 転入・転出の話は、3層目の計画で充実させたほうがよいと思う。
- ・ 人口バランスについてはどうか。

<事務局>

- ・ 中央を増やしたくないという意図はない。神戸市の人口動態で各区、各エリアでばらつきがあるのは事実だ。各エリアの魅力を維持するためには一定の人口規模が必要。具体的な指標をお示しできていないが、引き続き検討したい。また、転出超過の抑制は、転出の抑制と転入の増加の両面の取り組みである。どちらも重要と考えているので、3層の構成の中にしっかりと書き込んでいきたい。

<会長>

- ・ 簡単に言うと、転出超過はプラスにすることなので、問題ないと思う。

<委員>

- ・ 方向性②について、神戸空港の国際化に伴う外国人の転出入も考慮する必要がある。人口への影響をどう捉え、計画に反映させるかを検討すべき。
- ・ 方向性③について、人口あたりの外国人人口や政治団体・宗教事業所数などの客観データだけで幸福度を判断できるのか疑問である。例えば、外国人人口が多ければ寛容なまちなのか、こども食堂が多ければ良い社会なのかなど、これらが幸福度と結びつくかは議論が必要ではないか。今後、この指標をすべて使うのか、取捨選択していくのかをお聞きしたい。また、幸福度の主役は

神戸市民である。単に施設数だけではなく、その質や市民の評価も重要であり、多少のブレはあったとしても主観的データも取り入れるべきだと思う。

<会長>

- ・この客観値データというのはあくまでも参考か。

<事務局>

- ・お示しした客観値データは、国が公表している「w e l l - b e i n g 指標」の算出に用いられているものなので、すべて使用している。

<会長>

- ・どのように使っているかを今後検討・研究するということか。

<事務局>

- ・神戸市がK G I として用いるのは、国が公表しているこの客観データを基に算出された偏差値を用いるのが妥当だと考えている。
- ・ここに挙げたデータは、あくまで国が客観値として用いているものである。しかし、これだけで w e l l - b e i n g 指標が成立するかは不明で、主観データの補完が必要な可能性がある。今後、有識者の意見を聞きつつ、どのデータを指標として採用するか検討していく予定である。

<会長>

- ・客観指標の合成方法や作り方について関心があるので、また教えてほしい。仮想の計画で出てきた指標もあるので、その詳細度や精度についてよく検討する必要がある。

<委員>

- ・方向性②における 25～39 歳の転出超過については、若者の就職のタイミングでの転出が大きな要因であることを踏まえ、若者に選ばれる仕事の創出、地域と関わる機会をどう作るかを第3層の目標で反映させる必要がある。

<会長>

- ・これまで繰り返し指摘された内容である。ほかにはあるか。

<委員>

- ・方向性③の幸福度に関しては、w e l l - b e i n g 指標は主観と客観のデータをセットで捉えることが重要である。経済や暮らしの環境が整っていても、それが市民に届かなければ幸福度には反映されず、人口流出につながる。データを収集することには難しさもあるが、市民の主観的な幸福度や満足度を何らかの形で取得し、定点観測していくことは絶対に必要。それが②の「若者に選ばれる都市」へとつながると考える。
- ・もう1つが、方向性①は経済だが、国際都市や港・空港などの要素が混在していたり、②の日常・非日常の定義が曖昧な点が気になる。ワークショップに参加した人は、事前説明や動画を見た上

で理解・回答していたため入ってきやすかったが、それらの情報なしに基本計画の文章だけを読んだ人からは「内容が分かりづらい」「どこでも言えそう」という意見もあった。今後は、タイトルとKGIとの間により強い関連性や一貫性を持たせつつ、より分かりやすくシャープな表現へ検討する余地があると感じた。

<会長>

- ・主観的意見も行政にとって重要なセンサーとなるため、必ず聞くべき。ただ、それをKGIとして活用するかは別問題であり、今後の検討課題として整理する必要がある。

<委員>

- ・方向性③のグラフを見ると、全体的に客観データは主観データより低いですが、文化・芸術分野など一部では逆転している。これは、施設やイベント数などの客観指標は高いのに、市民の満足度は低い。その背景には、情報発信不足などの課題があるのではないか。一方で、事故・犯罪のように客観データが低くても、市民が安心・安全だと感じている分野もある。この両方のデータが逆転している項目について、その原因を検討する必要がある。

<会長>

- ・一般的に、客観治安よりも、市民が感じる治安（体感治安）の方が悪く感じられる傾向にある。ところが今回のように逆のパターンもあり、これは指標の取り方次第で変わる可能性がある。この「ずれ」自体が重要な情報を持っているが、深掘りし始めるとキリがなく、難しい側面がある。

<委員>

- ・多くの人がKGIだけで神戸を評価することに不安を感じているのは、まだ具体的なKPIが見えていないからではないか。KGIは大きな目標であり、その下により具体的なKPIが設定されるはずであり、そこで詳細に評価すべきだと理解している。このため、KGIだけを見て「本当に大丈夫か？」と心配するのは当然だが、そこは目線の違いである。
- ・主観と客観はともに重要である。客観指標の分析は必須で、主観指標も「見ない」のではなく、特にKPIで継続的に把握し、KGIで扱うかは今後検討すべき。主観と客観の差が生じる要因分析は、国などで既に行っている可能性があるため、それを確認して指標の確からしさを高めつつ、過度に深掘りしない範囲で細かく見ていくことが重要ではないか。
- ・人口減少は避けられない状況の中で、利便性の高い都心に人が集まるのは自然な流れだが、神戸市は広大な市域と多様な資源を持っている。その多様性を活かし、市全体でバランスよく生活できる環境を整えることが重要。居住機能の「抑制」という表現はネガティブにとられがちだが、商業・業務施設を都心に集積させることは、今後も進めるべき課題である。今後、選ばれるまちとしての魅力を高め、それぞれの場所でしっかり生活が営めるような社会を目指すというメッセージを、基本計画の文章や「ありたい姿」に反映することが望ましい。

<会長>

- ・KGIの性格付けと期間の射程を整理し、誤解やズレを解消すること。そして、方向性の文章から「ありたい姿」への論理的なつながりを明確にする必要がある。これらの点と、指標に関する

研究を進めることで、これまでの議論を十分に活かせるのではないかな。

- ・次の議題である「今後の市民意見収集について」、説明をお願いします。

3. 議事 （3）今後の市民意見収集について

<事務局>

- ・資料4に基づき説明

<会長>

- ・今後の市民意見収集の方法としてワークショップの説明があったが、ご意見・ご質問はあるかな。

<委員>

- ・ワークショップの流れはすごく良いと感じた。最初に「10年後の神戸の文章」を見せるのではなく、まず参加者が個人ワークとして未来像を描いてから提示することにより、その人らしい言葉が出てくるのではないかなと思った。また、この計画のアウトプットの形（絵や動画など）についても、ワークショップの中で意見を聞くのもいいのではないかな。

<会長>

- ・アウトプットの仕方も参加者に意見を聞くということ。ほかにはどうか。

<委員>

- ・ワークショップの時間が30～40分と短いことが懸念される。また、言葉を理解し、書くことが得意な人に参加者が限定されてしまうため、そうでない人が排除されずに参加できる方法を検討すべき。

<会長>

- ・計画通りに進めないと収まらないが、柔軟さも必要ではないかな。また、外国の方などには難しい面があるため、参加者の特性を踏まえて相談しながら進めるべき。
- ・アンケートの実施は考えているのか。

<事務局>

- ・後半はアンケートを利用して広く意見を集め、小中学生向けにはGIGA端末でのアンケートも計画している。

<会長>

- ・ほかの方法も追加していくと理解した。ほかにはあるかな。

<委員>

- ・ワークショップの台本イメージにある「私は今」の「私」が誰なのかを具体的に設定することが重要。例えば、参加者が子どもなら、2035年の大人目線を想定するのは難しいので、「2035年に

行ったらこんなまちがいいな」という子ども目線の設定の方がよいのではないかな。また、高齢者の場合は「65歳で耳が少し聞こえにくい」など、具体的な人物像を設定した方が考えやすい。誰にとっても同じ「素敵なまち」は存在しないので、それぞれの立場別に掘り起こすことが大切。そうすることで、最終的なアウトプットもより意味のあるものになるのではないかな。

<会長>

- ・「10年後の自分」という設定は、年齢を重ねた自分を想像するので、どういう「私」を想定するかは作り込みが大切。「自分が絶対なり得ない人」など荒唐無稽な設定でもよいのか。

<委員>

- ・多様な視点から意見を比較するのも面白いかもしれない。例えば、「25歳の女性」を男性が想像した場合、現実とのギャップを分析することで、社会課題が見えてくるかもしれない。また、障がいのある人の立場から見た理想のまちと、健常者が考える理想のまちにはずれがあるかもしれない。そのギャップを埋めることが、より良い市政につながるのではないかな。なかなか難しいが、そこを探ることには意義がある。

<会長>

- ・少し高度に感じるが、大変貴重な意見であり、その点も含めて今後の設定を検討する必要がある。

<委員>

- ・都市像の議論を言葉だけに限定せず、アート、レゴブロック、デジタルツールなどを活用した視覚的なアプローチも加えると、具体的なイメージが湧きやすいのではないかな。ワークショップはテンプレートに加え、実際のコミュニティや関係性に応じたバリエーションを持たせ、最後にそれらを統合するような形が望ましい。

<会長>

- ・ワークショップはテンプレートを基本にしつつ、難易度は高いがアンバサダーの企画に応じて言葉以外の多様な手法を取り入れてもいいのではないかな。
- ・本日の議論は以上で終了とする。今後のワークショップの方法は、提案された形を基本としつつ、多少の幅を持たせて実施する方針とする。それでは進行を事務局にお返しする。

4. 閉会

<西尾局長>

- ・皆様からの貴重なご意見に感謝する。今後も多くの作業が想定されるが、より良いものを作るため努力していきたいので、引き続き忌憚のない意見をお願いしたい。本日は感謝申し上げます。